

地域の中で部隊の歴史を守り、伝える
—近年のイギリスにおける連隊博物館の展示・活動から見えてくること—

The regimental and corps museums in present-day Britain:
a survey of their exhibitions and local collaboration activities

辻本 諭 (TSUJIMOTO Satoshi)

はじめに

現在のイギリスには、陸軍を構成する個々の連隊・部隊に関わる博物館（「連隊・部隊博物館 (regimental and corps museums)」）、以下「連隊博物館」と略記）が多数存在している。AMOT（後述）による 2010 年の集計によれば、その数は、ウェールズを含むイングランドに 115、スコットランドに 10、北アイルランドに 4、計 129 館にのぼる¹。軍事史家 I. F. W. ベケットが述べるように、「イギリス陸軍の最も特徴的な点のひとつはそれが持つ連隊の伝統」であり²、イギリスにおける連隊博物館の数の多さはこの伝統の強さを反映したものと考えることができる。1954 年には、両大戦を経験した退役軍人ロバート・オグルヴィ（1880～1964 年）により「陸軍博物館のためのオグルヴィ・トラスト (The Army Museums Ogilby Trust [AMOT])」が設立され、各連隊が持つ伝統、遺産を保護・継承しその価値を発信していくことを目的に、現在まで全国の連隊博物館に対して幅広い支援が行われている³。

もっとも、このように独特の存在感を有するにもかかわらず、イギリスにおける連隊博物館の知名度は決して高くないのが現状である。国立の大規模な軍事博物館、たとえば帝国戦争博物館 (The Imperial War Museums) や陸軍博物館 (The National Army Museum) がメディアや学界に注目され、その展示や活動が詳しく紹介・分析されているのとは対照的に⁴、連隊博物館が取り上げられることはまれである。学術領域に限ってみれば、日本はもとよりイギリス国内においても、20 世紀末に出版されたピーター・スウェイツの著作を除くと⁵、後者に力点を置いた研究はほとんど見当たらない。本論文は、そのような知られざる連隊博物館の展示・活動について、筆者自身が行った実地調査と資料調査をもとに考察することを目的とする。この試みは、イギリスにおける軍事博物館の独特のありようを示すとともに、近年とくに厳しさを増す中小博物館の運営環境と、その中で模索されている展示・活動の方向性に光を当てるものとなるはずである⁶。

以下では、まず連隊博物館の起源と本論文が検討対象とする 13 の博物館の概要について確認した上で（第 1 節）、そこで行われている展示の内容・手法を具体的に分析する（第 2 節）。さらに、イギリスのミュージアム全体が 21 世紀に入ってから大きな変革の時期を迎えている点に注目し、連隊博物館が置かれている現在の状況と、その中でどのような対応がなされているのかについて検討する（第 3 節）。なお、本論文の議論はすべて筆者が実地調査を行った 2020 年 2 月時点——イギリスにおいて新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が拡大する以前——のものであることを断っておく。

1. 連隊博物館の概要

イギリスのミュージアム学／史を研究するゲイナ・カヴァナによれば、同国における連隊博物館（またはその前段階としての部隊コレクションの収集）の起源は両大戦間期に求められる⁷。それは、第一次世界大戦後に活発化した、未曾有の大戦の記録を残そうとする大きな動き——戦史、部隊史、軍人の回想録の相次ぐ出版や、帝国戦争博物館の開館（1920 年、創設は 17 年）など——の一環をなすものであった。博物館設立の目的は、大戦において各連隊が果たした役割・功績を明らかにすること、また連隊内での戦争の記憶の共有とそれを通じての紐帯の強化をはかることにあったとされる。当初は一般に公開されることはまれで、専門性を持った学芸員も置かれず、展示を見る側も見せる側も連

隊の関係者が中心であった。連隊博物館のこのような内向きの性格は徐々に薄れていくものの、館の運営・活動における退役軍人の関与の大きさなど、その名残は現在においても感じられる。

次に、本論文が検討対象とする連隊博物館について見ていこう。下の表は、2020年2月に筆者が調査を行った13の博物館の所在地、入館料（大人料金）、ウェブページに関する情報をまとめたものである。各館において展示の見学と、併せて関連する資料（ウェブページや電子化された文書を含む）の調査を行ったが、Cornwall's Army Museum については、見学予定日に記録的な暴風雨（Storm Dennis）が重なり実地調査が不可能となったため、資料調査のみを実施した。

	博物館名	所在地	入館料	ウェブページ
1	The Adjutant General's Corps Museum	Winchester's Military Quarter, Winchester	-	https://www.winchestersmilitaryquarter.org/agcmuseum.html
2	Cornwall's Army Museum	The Keep, Bodmin	£6	https://bodminkeep.org/
3	The Duke of Wellington's Regiment Museum	Bankfield Museum, Halifax	-	https://museums.calderdale.gov.uk/visit/duke-wellingtons-regiment-museum
4	The Fusilier Museum London	Tower of London, London	£27.5*	https://www.fusiliermuseumlondon.org/home
5	The Gurkha Museum	Winchester's Military Quarter, Winchester	£5	https://thegurkhamuseum.co.uk/
6	HorsePower, The Museum of the King's Royal Hussars	Winchester's Military Quarter, Winchester	£3	http://horsepowermuseum.co.uk/
7	The Rifles Museum	Winchester's Military Quarter, Winchester	-	http://riflesmuseum.co.uk/
8	The Royal Green Jackets (Rifles) Museum	Winchester's Military Quarter, Winchester	£5	http://rgimuseum.co.uk/
9	The Royal Hampshire Regiment Museum	Winchester's Military Quarter, Winchester	-	https://www.royalhampshireregiment.org/
10	The Royal Norfolk Regimental Museum	Norwich Castle Museum & Art Gallery, Norwich	£9.9*	http://www.royalnorfolkregimentalmuseum.org.uk/
11	The Royal Regiment of Fusiliers Museum (Royal Warwickshire)	St. John's House, Warwick	£4	http://www.warwickfusiliers.co.uk/
12	The Soldiers of Gloucestershire Museum	Custom House the Docks, Gloucester	£5	https://soldiersofglos.com/
13	York Army Museum	Tower Street, York	£5	https://www.yorkarmymuseum.co.uk/

*それぞれ Tower of London、Norwich Castle Museum & Art Gallery に入場・見学するのに必要な料金を示す。

まず各館の所在地について見ると、イングランド南部(1、5、6、7、8、9)、西部(2、12)、北部(3、13)、東部(10)、中部(11)、ロンドン(4)に区分でき、イングランドのほぼ全域に分散している。これは、筆者が地域的な多様性を考慮して調査対象とする博物館を選択したことによる。南部の数が多いのは、次に述べる通り、調査地のウィンチェスタに6つの博物館が集中しているためである。

立地形態に目を向けると、13の博物館のうち10館（2、12、13以外）が、他の博物館や美術館とともに複合的な文化施設を構成していることが注目される。ウィンチェスタでは、6つの連隊博物館（1、5、6、7、8、9）が近接した区域に配置され（Winchester's Military Quarter と呼ばれる）、訪問者がまとめて見学しやすい立地となっている。一方、ハリファクス、ロンドン塔、ノリッジ、ウォリックでは、連隊博物館がそれぞれの地域の総合／複合博物館の中に収容されている（3、4、10、11）。第3節で立ち入って検討するが、このような集積的な立地が見られる背景として、地域における文化資源の協働的かつ効率的な活用を目指す、現在のイギリスの文化政策の影響を指摘することができる。

入館料については、料金を設定している博物館が9館、設定なし（無料）が4館となっている。こ

れも第3節で指摘する通り、近年、政府や地方自治体からの補助金が急激に削減され、それとともに入館料を新規に設定または値上げする博物館が増加しており、上記の数字はこの動向を反映したものと考えられる。試みに2010年と2020年の入館料を比較してみると、たとえばThe Royal Regiment of Fusiliers Museum (Royal Warwickshire) では無料から4ポンドに、Cornwall's Army Museum では2ポンドから6ポンドに、それぞれ変更がなされている⁸。

展示の内容については次節において考察するが、いくつかの博物館ではここ数年間に公的な助成を利用するなどして大規模な改装が行われ、新しい視点や技術の導入が積極的に進められている。たとえばThe Soldiers of Gloucestershire Museumは2014年に、York Army MuseumとThe Royal Green Jackets (Rifles) Museumは2015年に、それぞれ館の一部ないし全館がリニューアルされ、一新された展示が多くの見学者をひきつけている。The Soldiers of Gloucestershire Museumの信託財産管理理事会の理事長(chairman of the trustees)が2014年の再開館時に述べた次の言葉からは、改装に対する博物館側の期待・熱意と、実際の成果の大きさを窺うことができる。

本博物館は〔2014年〕5月に再オープンしました。今回の文化遺産宝くじ基金による助成金〔Heritage Lottery fund grant〕の成果を目にした誰もが身震いしたに違いありません。RWDP〔博物館の設計・デザインを専門に行う企業〕が私たちのためにしてくれた仕事は本当に素晴らしく、すべての展示室が完全に一新されました。とくにマルチメディアのスクリーンが導入されたことにより展示に新たな次元が加わり、これを新しい解説ボードやフリップブックと組み合わせることで、取り上げられている人びとや彼らの軍事作戦行動についてはるかに詳細な説明をすることが可能となります。またマルチメディア機器を利用することで、新しい研究や考え方が出てきたときに、つねに解説の追加や修正を行うことができます。〔しかし〕私たちはここで立ち止まるつもりはありません。〔第二次世界大戦後の〕北アイルランドでの活動や冷戦期について付け加えるべきことはまだたくさんあり、現在それらに取り組んでいるところです⁹。



一方で、たとえばThe Royal Hampshire Regiment Museumのように、昔ながらの展示が残されたままのところもある（同館では現在も入館料は無料である）。このように連隊博物館の中でも、近年に改装の機会を得られたか否かによって展示の方法や内容に明らかな違いが見られるのが印象的であった。

The Royal Hampshire Regiment Museum
入口から見た館内の様子。筆者撮影。

2. 展示内容についての検討

連隊博物館の展示には、いくつかの共通する要素を見出すことができる。まず、部隊の来歴（創設から現在に至るまでの編成の変化）が系図や年表を使って示され、また部隊ごとに定められた（各時代の）軍服、記章、旗、モットーなどがその意味・由来の解説とともに展示されている。これらはいずれも部隊のアイデンティティに関わるものであり、連隊博物館が何よりも部隊の固有の歴史とそれによって育まれてきた独自の文化・価値観を明らかにする場であることを考えれば当然の特徴と言える。また、部隊（に所属する軍人たち）が獲得した勲章を集めた部屋ないしスペースが必ず設けられており、有名な個人に注目した展示も多く見られる。たとえばThe Rifles Museumでは、「部隊の創設



The Duke of Wellington's Regiment Museum
時代・戦争ごとに区切られた展示スペース。部隊将兵たちの従軍経験が数多く紹介されている。筆者撮影。



The Rifles Museum
アフガニスタンおよびイラクにおける戦争についての展示（上）と戦没した将兵を追悼するスペース（下）。筆者撮影。

者」であるサー・ジョン・ムーア（1761～1809年）とカート・マニングラム（c.1765～1809年）の功績と、彼らの半島戦争（1808～14年）における英雄的な死が、絵画や墓所のモニュメントなどの資料を交えて説明されている。

博物館全体の展示のつくりにも共通性が見られる。すなわち、時代ごと、あるいは重要な戦争ごとに部屋／コーナー／ボックスを割り当て、それぞれの時代・戦争における部隊の経験を時系列に沿って解説するやり方が一般的である。各展示スペースでは、部隊に関わる具体的な事件、人物、モノが取り上げられ、そうした個別事例・資料を手がかりに、戦争の全体状況とその中で部隊の活動が描き出される。一例を挙げると、The Fusilier Museum London では、時代・戦争ごとの展示スペースに、実際に従軍した部隊将兵たちの言葉が豊富に引用され、彼らの経験が絵画や写真などとともに詳しく解説されている。

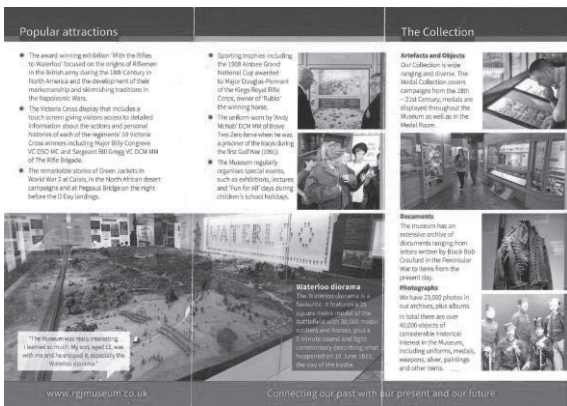
また連隊博物館の展示においては、両大戦までのみならず、20世紀半ば以降の現代における諸戦争も例外なく取り上げられている。たとえば The Rifles Museum では、イギリス陸軍が深く関わった今世紀初頭のアフガニスタンおよびイラクにおける戦争（それぞれ2001～14年〔撤退〕、2003～09年〔撤退〕）と、そこでの部隊の活動が紹介されており——同館ではさらに、この戦争で没した部隊将兵を追悼するスペースも設けられている——イギリスにとって戦争／軍隊が、いま目の前に存在する現実の問題であるというメッセージが強く打ち出されている¹⁰。

次に、今回の調査で筆者の関心を引いたいくつかの展示について見ていきたい。帝国戦争博物館や国立陸軍博物館に見られるように、近年の軍事博物館において目立つのは、見学者に戦争・軍隊の現実を体感してもらう体験型の展示である¹¹。この手法は、現在多くの連隊博物館においても取り入れられている。定番は、第一次世界大戦における塹壕戦を再現した実物大の

セットで、たとえば The Duke of Wellington's Regiment Museum では、再現された塹壕の中に展示スペースが設けられ、見学者は当時の戦争の雰囲気を感じながら展示を見て回ることができる¹²。他にユニークな体験型展示を2つ挙げると、まず The Soldiers of Gloucestershire Museum では、まだ十分



The Duke of Wellington's Regiment Museum
第一次世界大戦の塹壕戦を再現した展示スペース。筆者撮影。



The Royal Green Jackets (Rifles) Museumのリーフレット。左下にワーテルローの戦いを再現したジオラマが紹介されている。

られた3枚の大スクリーンに、ワーテルローの戦いから第二次世界大戦までの諸戦争における将兵たちの「極限の、困難に満ちた直接の経験の数々」が映し出され、筆者が実地調査を行った当日には多くの見学者の注目を集めていた。またフロアの各所には、過去の戦争で用いられた兵器、装備、戦術に関するハンズオンのコーナーが設けられ、子供から大人まで楽しめる工夫がなされている。

もっとも、こうした高度な技術・設備に頼らずとも、旧来の軍事史とは異なる視点からアプローチすることで、同じように魅力的な部隊史が描き出されている例も見られる。たとえば The Adjutant General's Corps Museum では、「女性と陸軍」「陸軍における教育」「規律と懲罰」「戦争捕虜」といった社会史的なテーマが数多く取り上げられていて、館の規模は小さく展示スタイルも旧式であるものの、きわめて興味深い展示空間を生み出している¹³。念のため付言しておけば、このような取り組みは決して特異なものではなく、他の博物館でも「病気・医療」「食事」「式典」「スポーツ」など多様なトピックが検討されている¹⁴。

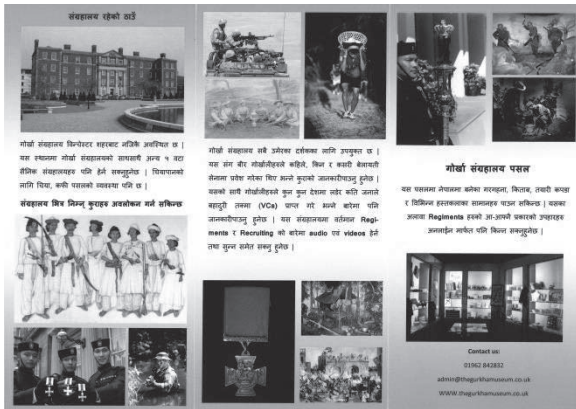
もうひとつ、13の連隊博物館すべての展示において気づかされるのは、そこで扱われる地理的範囲の広さである。これはイギリス陸軍のほぼすべての部隊が、18世紀以降、本部 (depot) がどこに置かれたかによらず——13の博物館と繋がる部隊の本部はいずれもイングランド内に置かれていた——イングランド外 (ブリテン諸島、イギリス帝国、さらにはその外側) での勤務を求められたことによる。こうして、イギリス陸軍の部隊史を描くいかなる試みも、必然的にイギリスの複合国家としての、また植民地帝国としての軌跡と重なり合うことになる。実際に、展示に含まれる戦争は、イギリスの帝国拡大、その後の世界における覇権争いの過程を反映して、ヨーロッパ、北米、中南米からインド、アフリカ、中東、東南アジア、内陸アジア、東アジアまで全世界に広がり、ブリテン諸島内ではアイ

な居住環境が整えられていなかった時期 (おそらく19世紀前半) の兵舎での既婚兵士の家族生活の様子が、音声を含めた実物大のセットにより臨場感豊かに再現されている。もうひとつは、HorsePower, The Museum of the King's Royal Hussarsにある厩舎の展示で、各種の馬具を使って騎兵が馬を世話する様子が、馬や皮革の匂いとともに忠実に再現されている。

このように見る側の五感に訴えかける展示の中でも筆者がとくに強い印象を受けたのが、The Royal Green Jackets (Rifles) Museum内にあるワーテルローの戦いのジオラマである。同館では2015年に改装が行われた際に、ナポレオン戦争における部隊の活動・経験を詳細に伝える新しい展示区画「ライフル部隊とともにワーテルローへ」がつけられ、同区画の最後の展示室の中央にこのジオラマが置かれている。部屋の壁面にはワーテルローの戦いとその結果に関する解説が示され、見学者はそれらを見ながら、広さ25㎡、30000体以上の将兵・馬の模型が散りばめられたこの壮大な戦争パノラマを楽しむことができる。ジオラマには、音声による語りに音響・照明による演出が加味されて、5分間にわたる戦闘スペクタクルが展開される。

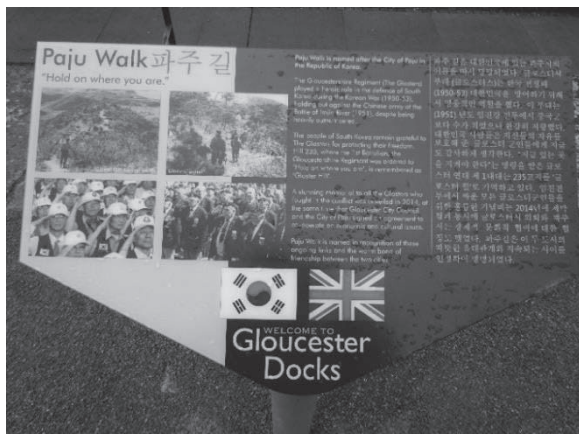
同じく大がかりな改装をへて2015年に再オープンしたYork Army Museumでは、フロア中央に置か

ルランドにおける武力紛争——とりわけ 20 世紀後半の北アイルランド問題——がその歴史的背景も含めて詳しく取り上げられている。このように、連隊博物館における語りは意外なほどにブリテン史的／世界史的なのである¹⁵。



The Gurkha Museum のネパール語版リーフレット。写真やレイアウトは英語版とは異なっている。

注目したいのは、イギリスがグローバルな軍事活動を行っていく中で、これまで世界のさまざまな地域・人びとの間に軍隊を介した関係性が生まれてきたということである。ここでは2つの事例を挙げたい。ひとつは、現在もイギリス陸軍の一部を構成しているグルカ部隊である（現在の人員数は約 3400 人）¹⁶。グルカとはネパールの山岳地帯に居住する人びとの総称で、イギリスは 18 世紀以降インドへの進出・植民地化を進めていく中で、彼らを現地での（後には世界各地での）戦争に従事する戦闘集団として雇用していった。本研究の調査対象のひとつである The Gurkha Museum は、イギリス陸軍におけるグルカ部隊の歴史とその活動を伝える博物館である。同部隊は 19 世紀初頭に組織されて以来、200 年余りにわたってイギリス陸軍において活動を続け、第一次世界大戦には約 10 万人、第二次世界大戦には 11 万 2000 人が従軍し、両大戦合わせて 4 万 3000 人も死傷者を出している¹⁷。博物館の展示において目指されているのは、このようにグルカ部隊がイギリスのためになしてきた「勇敢で並外れた貢献」を伝えることであるが¹⁸、同時に筆者を含めおそらく多くの見学者が感じるのは、グルカ部隊が持つ（イギリス軍の中での）特殊性・異質性である。それはたとえば、最初の展示区画「グルカの人びととその故郷」の中で、彼らが生まれ育った環境とそこでの生活・文化が紹介され、また以降の戦争展示において彼らの独特な装備や戦い方が繰り返し示されることで強く印象づけられる。全体としてグルカ部隊の歴史は、イギリスがかつて世界帝国であった事実とそれによってもたらされた世界との関わりを映し出すものとなっている。



The Soldiers of Gloucestershire Museum の入口に飾られている、韓国国防相からの感謝を伝えるブランク（上）と、Paju Walk の脇に立てられた、遊歩道整備の経緯を説明するボード（下）。筆者撮影。

（Battle of the Imjin River）では、ソウル目前まで押し寄せた中国軍に対して、同連隊を含む歩兵第 29 旅団が多数の死傷者・捕虜を出しつつもこれを食い止め、首都の防衛に大いに貢献した。グロースタシャ連隊の歴史と活動を伝える The Soldiers of Gloucestershire Museum では、朝鮮戦争について個別の

もうひとつの事例は、グロースタシャ連隊と韓国との繋がりである。同連隊は朝鮮戦争（1950～53 年）時に韓国防衛のために朝鮮半島に派遣され、侵攻してきた中国軍と激しい戦闘を繰り返したことで知られる。とくに 1951 年 4 月の臨津江の戦い

展示室が設けられており、連隊の功績が詳しく解説されている。また、臨津江の戦いから 60 年の節目に当たる 2011 年には、グロースタシャ連隊の貢献に対して韓国国防相から感謝を伝えるプラークが贈られ、博物館の入口に飾られている。さらに 2014 年には、臨津江で戦った部隊将兵のための記念式典が韓国において開催され¹⁹、同時に博物館のあるグロースタと韓国の坡州（戦場となった臨津江に面する都市）の間で経済・文化の両面で協力関係を築いていくことが合意された。これを受けてグロースタでは、The Soldiers of Gloucestershire Museum に程近いセヴァン河畔の船渠に「坡州遊歩道 (Paju Walk)」を整備し、これを「両市を結び続ける温かい友情の絆」のしるしとしている。

この事例からは、地理的に遠く隔たった 2 つの地域とそこに住む人びとが、戦争をめぐる共通の経験と記憶を通じて結びつけられてきたことが確認できる。この動きの中で、部隊の歴史を守り伝える連隊博物館は中心的な役割を果たしていた。連隊博物館の展示・活動は、個々の部隊／地域にフォーカスするがゆえに「ローカルな」——具体的な人や場所に深く関わる——レベルで、時に国を越えた繋がりや交流を生み出す力となりうるのである。

3. 連隊博物館をめぐる環境の変化と対応への模索——公的財政支援が縮小する中での運営と活動——

現在の連隊博物館の展示・活動を考える上で、博物館をめぐる近年の環境の変化とその影響を見逃すことはできない。本節ではこの点について具体的に検討していくことにしたい。

21 世紀に入りイギリスのあらゆる文化施設が経験した最大の変化は、2000 年代後半の世界的な金融危機を契機に本格化した、国や地方自治体から交付される補助金の継続的な見直しと削減である。英国ミュージアム協会 (The Museums Association) が 2017 年に公表した報告書によれば、2010 年以降少なくとも 64 のミュージアムが閉館し、その大半が公的財政支援の縮小に起因する資金難によるものであった。とくに地方自治体からの補助金は、2010 年から 16 年の間に 31% も減少したという²⁰。

軍事博物館については、館運営の重要な柱である国防省からの補助金削減が大きな議論を呼んでいる。国防省は連隊博物館について、(現在の編成での) 連隊あたりひとつの博物館のみを補助金の交付対象とし、2030 年までに公費が支給される博物館の数を半分にすることを発表している²¹。この計画は着実に進行しており、2017 年 1 月に掲載された「フォーシズ・ネットワーク (Forces Network: イギリス軍放送サービス [British Forces Broadcasting Service] が運営するウェブサイト) の記事は、同年中に 14 の連隊博物館が補助金支給を打ち切られると伝えている²²。多くが小規模で商業的な運営にも不慣れた連隊博物館にとって、これは館の存続を揺るがす深刻な事態であり、実際に 2010 年代半ばからイギリス各地で博物館閉館の危機が叫ばれ、それを回避するための方策が模索されるようになった。たとえば、イングランド中西部シュルーズベリの The Shropshire Regimental Museum では、国防省が上述のように補助金の打ち切りを決定したことで年 3 万ポンドの収入が失われ、2017 年以降の運営が見通せない状況となった。しかし幸運にも、すぐに地元の有志の間で館の存続を求める運動 ('Keep Our Shropshire History Alive [KOSHA]') が広がり、シュルーズベリおよび近隣の自治体が支援に乗り出すことに繋がった。同館は 2019 年に The Soldiers of Shropshire Museum と名称を変え、地域社会との新たな連携のもとで再出発を果たしている²³。

シュルーズベリの事例が示すように、連隊博物館の存続・再生をはかる近年の試みにおいて明らかなのは、地域社会との結びつきの中で博物館の存在意義を再確認していく動きである²⁴。現在のイギリスでは、ミュージアムに対して「コミュニティの結束 (community cohesion) / 人びとのコミュニティへの関わり (community involvement)」を促し、「場づくり (place making)」を推進していく役割が求められているが²⁵、いま連隊博物館に顕著に見られる変化はまさにこの動向に沿ったものと解釈することができる。そこで重視されるのは、従来よりも一層地域に開かれた展示・活動を行っていくこと、軍事という枠を越えて地域の他の文化資源・施設と積極的に協働し、より大きな魅力・価値を生み出していくことである。たとえば Cornwall's Army Museum では、現在、2030 年に国防省からの財政



Corwall's Army Museum が提供している中学校・高校用の学習プログラム (左) と学習教材 (右)。いずれも博物館のウェブページから無料で閲覧・ダウンロードすることができる。

の担い手となってもらおう試み——上記の報告書では「ボランティアは私たちの仕事の中核を担う人びとである」と述べられている²⁶——と、地域の学校と連携した教育活動の充実である。後者については、博物館での学習プログラムや館の資料を活用した学習教材が、小学校から高校まで見学者の学習段階に合わせて豊富に用意されている²⁷。さらにユニークなのは「学生学芸員 (Young Curators)」プログラムで、これは博物館が地域の学生をスタッフとして受け入れ、さまざまな業務経験 (展示作成の補助、館内の案内、イベントの企画・実施、ブログの執筆など) を通じて彼らに博物館に関わる専門的な知識や技術を学んでもらうものである²⁸。

地域の他の文化施設との協働に関しては、The Royal Norfolk Regimental Museum に注目したい。同館は 2013 年にノリッジ城に移転し、Norwich Castle Museum & Art Gallery の一構成員となった。この複合施設の中で連隊博物館は、「ノーフォークの文化・自然遺産に対する人びとの関心を生み出し刺激する」という共通の目標に取り組んでいる。現在の Norwich Castle Museum & Art Gallery は、考古学 (archaeology)、美術 (fine arts)、装飾芸術 (decorative arts)、自然史 (natural history)、連隊博物館の 5 つのセクションからなっており、見学者はこれら多様な領域の地域遺産をまとめて、また相互参照しながら見て回ることができる。あくまで歴史という観点から見学した筆者個人の印象であるが、各セクションがそれぞれの観点からノーフォーク史およびイギリス史——領域の特性によって扱われる時代は異なる——を描いていて、単一の視点から語られる通史よりも見学者にとって新たな関心や発見が得やすいのではないかと感じられた²⁹。

ところで、連隊博物館の周囲には多くの場合、部隊に関係する建物や記念物がいくつも存在している。そもそも連隊博物館は、かつて連隊の本部が置かれた場所に立地していることが多く、たとえば Winchester's Military Quarter では区画内において旧兵舎 (Peninsula Barracks) の建物——現在は上品な外観の民間の集合住宅となっている——を見ることができる。一方、Norwich Castle Museum & Art Gallery のあるノリッジ市の中心部には、ボーア戦争 (1899~1902 年) および両大戦の戦没者のための記念碑がそれぞれ建てられているほか、ノリッジ大聖堂内に 2 つの郷土部隊 (ロイヤル・ノーフォーク連隊とロイヤル・アングリアン連隊) のための礼拝堂 (St. Saviour's Chapel) が設けられている。礼拝堂内には、頭上に掲げられた連隊旗やステンドグラスに埋め込まれた連隊記章、これまでの戦争で犠牲となった将兵を追悼する彫刻やプラークなど、部隊の記憶を伝えるものが溢れており、これら郷土部隊と地域社会との結びつきの強さが窺える。同様の例は本研究の調査の範囲でも、ウィンチェスタ大聖堂、ウォリックのセント・メアリ教区教会、グロースタ大聖堂、ヨーク大聖堂、ハリファク

支援が終了することを見据えて、館の自立的な運営を実現するための長期的な改革プランが立案・実践されている。2018 年の同館の活動に関する報告書によれば、「すべてのプロジェクトが、今後の国防省からの資金の削減に備え、博物館利用者の確保とより強固な〔運営〕基盤の構築に役立てるべく計画された」ものであり、その成果として、売上 (入館料・商品販売) と寄付を含めた収入が 2017 年との比較で 60% 以上増加したことが挙げられている。取り組まれているプロジェクトは多岐にわたるが、中でも目を引くのは、地域住民にボランティアとして博物館業務



ノリッジ市庁舎前に建てられた、両大戦戦没者の記念碑（上）

ノリッジ城の敷地に隣接して建てられた、ポーア戦争戦没者の記念碑（中）

ノリッジ大聖堂内のセント・セイヴィアズ・チャペル（下）

いずれも筆者撮影。



スのセント・ジョン教区教会（ハリファクス・ミンスタ）で確認することができる³⁰。

より積極的に、郷土部隊の記憶の継承を目的として、地域社会が協働し新たな文化資源が創出されることもある。たとえばハリファクスでは、2019年に同市のある西部ヨークシャと関係の深いウェリントン公爵連隊——2006年に他の2つの連隊と合併してヨークシャ連隊となり、単独の部隊としては消滅した——の300年余りに及ぶ活動と功績を記念するモニュメントが、まちの中心部に広がるショッピングセンターの一角に建設された（次頁の写真を参照）。この記念像は、イギリスの著名な彫刻家アンドルー・シンクレアの作品で、軍関係者や地域社会から多額の寄付を募って製作が進められた。正面の四体の軍人像——いずれもきわめて写実的につくられている——は、それぞれアメリカ独立戦争時の兵士（中央下）、ナポレオン戦争時の軍曹（右）、第一次世界大戦時の将校（左）、現代の軍人（中央上）を表し、左側面の初代ウェリントン公爵（1769～1852年）の胸像とともに部隊の4世紀にまたがる歴史が表現されている。また軍人像の背後には連隊旗と、その下に部隊兵士の家族（妻と2人の子供）の姿が彫刻されている。彼らが旗棒を握っているのは、部隊が家族によって支えられていることを示すのであろうか。他にも、象やラグビー選手のレリーフなど、部隊の歴史・活動を象徴する意匠が散りばめられている³¹。

この記念像の製作・設置について、カルダゲイル大都市圏自治区（the metropolitan borough of Calderdale）の区長（mayor）と区首席行政官（chief executive）はそれぞれ次のように述べている。

〔ウェリントン公爵〕連隊は、ここカルダゲイルにおいて長く誇るべき歴史を持ち、私たちの文化遺産の重要な一部をなしています。そして私たち自身がよく知っているように、地域の人びとは連隊に対して大いなる敬意を抱いています。私たちは、軍隊に対する献身〔commitment〕のひとつの形として、地元の軍人とその家族の名誉を称える伝統を継続していくことを望んでいるのです。この記念像によってカルダゲイルは、見るべき遺産・文化を持つ観光地として、これから地図の中で大いに取り上げられることでしょう。

ハリファクスは記念像が建てられるのにふさわしい場所です。連隊はこのまちと長年にわたる繋がりを持っていますし、また〔市内にある〕バンクフィールド・ミュージアムは連隊博物館を擁し、ハリファクス・ミンスタには連隊旗が掲げられていて私たちの誇りとなっているのですから。この重要な記念像は、訪れるべき遺産・文化の地としてのカルダゲイルの人気をさらに高めてくれることでしょう³²。

これらの言葉からは、自治体が郷土部隊の歴史を文化資源として高く評価し、それを積極的に地域社会／経済の発展に繋げていこうと考えていることが読み取れる。この点を踏まえれば、おそらく現在



The Duke of Wellington's Regiment Memorial, Halifax
ショッピングセンターの一角にあり、つねに多くの人が周囲を歩き交っている。筆者撮影。

の連隊博物館に求められているのは、かつてのように部隊の歴史をただ内向きに（超然として）守り伝えていくのではなく、本節において見てきたような地域の多様なニーズや利害をうまく捉え、それらと相利的な関係を築きながら自己の魅力・価値を高めていくことであろう。この方向性の是非については今後の議論に委ねざるをえないが、しかし少なくとも、近年変わりつつある連隊博物館の展示・活動に、商業化と地域社会との協働という2つのベクトルが決定的に作用していることは確かである。

おわりに

本論文では、これまでほとんど取り上げられることのなかった現代イギリスの連隊博物館の展示と活動について、博物館を取り巻く時代状況にも注目しつつ具体的に検討してきた。現在の連隊博物館の多くは、部隊の伝統、遺産を保護・継承していくという「本来の」使命を果たし続けると同時に、多様な関心を有する見学者——その大半は軍隊と必ずしも個人的な繋がりを持たない——にますます目を向けるようになってきている。そして、部隊の関係者が集い絆を確認する場という側面は残しながらも、伝統的な軍事史とは一線を画する、新しい視点や手法を取り入れた展示に取り組んでいる。この点は、現在の国立陸軍博物館にも共通して見られる動向と言えるだろう。

一方で連隊博物館に特徴的なのは、公的財政支援の縮小による厳しい運営状況とも関連して、地域社会との協働が積極的に進められている点である。第3節で指摘した通り、いま多くの連隊博物館が、地域の他の文化施設や学校、自治体と連携を深めながら、自らの文化的／教育的／商業的価値を高めようと試みている。実のところ、筆者が本研究の調査の中で最も魅力を感じたのも、連隊博物館と地域社会の近さ・繋がりであった。博物館を見学した後に付近を歩けば、部隊の歴史・記憶に関わるモノや場所があれこれと目に入ってくる。そうした身近な発見は、多くの人が軍隊や戦争をめぐるさまざまな問題に主体的な関心を向けるきっかけとなるはずである。

「地域の中で部隊の歴史を守り、伝える」。繰り返しになるが、この役割を一層開かれた／多様な形で追求していくことが、21世紀の連隊博物館には求められていると言えるだろう。

¹ The Army Museums Ogilby Trust, *The AMOT guide to military museums in the UK, 2010/11 edition*, London, 2010. ただし、ここには国立陸軍博物館など連隊博物館ではない軍事博物館もごく一部含まれている。

² I. F. W. Beckett, *Discovering British regimental traditions*, 2nd ed., Princes Risborough, 2007, p. 5.

³ *The AMOT guide*, pp. 8-9.

⁴ たとえば、Stefan Berger, 'National museums of war in Britain between antagonism and agonism: a comparison of the Imperial War Museum with the National Army Museum', *Annali dell'Istituto storico italo-germanico in Trento*, 46-1, 2020, pp. 133-159; 辻本論「軍隊と一般の人々をどうつなぐか—英国国立陸軍博物館 (NAM) の新たな試み」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』67巻2号、2019年、39～48頁。前者については、西山暁義氏に紹介していただいた。記して感謝する。

⁵ Peter Thwaites, *Presenting arms: museum representation of British military history, 1660-1900*, London, 1996. 同書は、1990年代までのイギリスの軍事博物館を、その成り立ち、所有するコレクション、展示の内容・方法などさまざまな観点から考察したもので、多くの連隊博物館が事例として取り上げられている。本論文は、スウェイツの研究成果に学びながら、しかし21世紀に入ってからの諸変化を踏まえて、2020年現在の連隊博物館の姿を検証していこうとするものである。

⁶ 本論文の問題関心は、佐々木真 (駒澤大学) を代表者とする科研費共同研究「戦争叙述のための博物館の可能性—歴史の方法の有効性について」(基盤研究 B、2015～17年度) および「戦争の「歴史化」を考える—「戦争の消費」と戦

争認識の変化」(基盤研究 B、2019 年度から継続中)に多くを負っている。

⁷ Gaynor Kavanagh, *Museums and the First World War: a social history*, London, 1994, pp. 157-159. また、Thwaites, *Presenting arms*, ch. 2 も参照。なお、本論文が扱う連隊博物館のうち Cornwall's Army Museum は 1925 年、The Soldiers of Gloucestershire Museum は 1926 年にそれぞれ創設されている。

⁸ 2010 年の入館料については、*The AMOT guide* を参照。英国ミュージアム協会の 2017 年と 18 年の報告書によれば、軍事博物館の中で入館料をとる割合は、この 1 年間に 35%から 61%に増加している。Museums Association, 'Museums in the UK: 2017 report', April 2017, p. 11. (<https://www.museumsassociation.org/app/uploads/2020/07/03042017-museums-in-the-uk-2017-report.pdf>); Do, 'Museums in the UK: 2018 report', February 2018, p. 9. (<https://www.museumsassociation.org/app/uploads/2020/07/31012018-museums-in-the-uk-2018.pdf>) 2020 年 10 月 26 日閲覧。以下、オンライン資料の閲覧日はすべて同じ。

⁹ 'Newsletter, autumn 2014' (<https://issuu.com/soldiersofgloucestershiremuseum/docs/>)

¹⁰ アフガニスタン、イラクにおけるイギリス陸軍の活動については、調査を行ったほぼすべての博物館で取り上げられており、たとえば York Army Museum では、同地に従軍した軍人たちのインタビュービデオも併せて放映されていた。

¹¹ 国立陸軍博物館における体験型の展示については、辻本「軍隊と一般の人々をどうつなぐか」を参照。

¹² Cornwall's Army Museum では塹壕を屋外に再現しており、見学者はよりリアルな雰囲気を感じることができる。

¹³ 同館のリーフレットには、「イギリス陸軍の社会史を発見しよう」という言葉が掲げられている。

¹⁴ 陸軍の各部隊とスポーツの密接な関係については、Thwaites, *Presenting arms*, pp. 83-84 を参照。

¹⁵ 言うまでもなく、これは連隊博物館における語りが中立的であることを意味しない。むしろ、イギリス陸軍の部隊を主体とするがゆえに、勝者(≒征服者、植民地支配者)目線の説明・描写がなされる傾向がある。

¹⁶ グルカ部隊の歴史と、彼らのイギリスへの定住・市民権獲得をめぐる問題については、上杉妙子による複数の研究がある。ここでは、上杉妙子「グルカ兵はどのようにして英国市民になったのか?—移民退役軍人による多層的な自己包摂の試みと市民権の再構築」(田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015 年、459~485 頁)を挙げておく。

¹⁷ 以上の数字は、The Gurkha Museum で販売されている 'Fact File on the Brigade of Gurkhas' による。

¹⁸ 引用は、同館のリーフレット(英語版)からのものである。

¹⁹ この記念式典については、「Commonwealth veterans remember Imjingang River battle', *KOREA.net*, 29 April 2014. (<https://www.korea.net/NewsFocus/Society/view?articleId=119154>) を参照。

²⁰ Museums Association, 'Museums in the UK: 2017 report', pp. 13, 16. Hedley Swain, 'Museums in the UK: recent trends' (京都国立博物館における講演、2017 年 9 月 23 日、https://icom-kyoto-2019.org/data/images/hedley_swain-lecture-e.pdf) も参照。

²¹ 'Worcestershire risks losing its historic treasures after MoD cuts funding to regimental museum', *Worcester News*, 12 January 2017. (<https://www.worcesternews.co.uk/news/15018359.worcestershire-risks-losing-its-historic-treasures-after-mod-cuts-funding-to-regimental-museum/>)

²² 'MoD cuts funding to British army museums', 9 January 2017, *Forces Network*. (<https://www.forces.net/services/army/mod-cuts-funding-british-army-museums>)

²³ 'Marching on at rebranded soldiers of Shropshire Museum', *Shropshire Star*, 7 September 2019. (<https://www.shropshirestar.com/entertainment/attractions/2019/09/07/marching-on-at-rebranded-soldiers-of-shropshire-museum/>); 'New appeal aims to save Shrewsbury museum', *Shropshire Star*, 14 November 2016. (<https://www.shropshirestar.com/entertainment/2016/11/14/new-appeal-aims-to-save-shrewsbury-museum/>)

²⁴ KOSHA の代表モーリス・ハリデイは『シュロップシャ・スター』紙の取材に対し、「シュロップシャの地元の家で[連隊]博物館と何の繋がりも持たない家は州中にひとつもないと思う」と述べ、だからこそ「もし博物館が閉館することになれば、それはシュロップシャ、またシュルーズベリにとって、恐るべき損失である」と主張していた。(Ibid.) もつとも、連隊博物館と地域社会(とくに他の文化施設)との連携は、ひとつには国防省の支出削減に対応する必要から、少なくとも 1960 年代以降に試みられてきたことであった。Thwaites, *Presenting arms*, ch. 3, pp. 116-117 を参照。

²⁵ たとえば、National Museum Directors' Council, 'Museums matter', 2015, p. 13. (https://www.nationalmuseums.org.uk/media/documents/publications/museums_matter_web.pdf); Local Government Association, 'Making the most of your museums: a handbook for councillors', July 2019, pp. 9-10. (https://www.local.gov.uk/sites/default/files/documents/12.20_Museums_Handbook_V11_WEB.pdf); Swain, 'Museums in the UK', pp. 5-6.

²⁶ Cornwall's Regimental Museum CIO, 'Review of the year 2018/19', pp. 2, 3, 5. (<https://bodminkeep.org/wp-content/uploads/2019/05/Annual-Review-Booklet-201819-.pdf>)

²⁷ 学習教材では「配給と食事」「戦時の女性たち」「音楽と軍隊」など興味深いテーマが取り上げられている。教材内に挙げられている参考資料はいずれも資料館・博物館のウェブページや YouTube の URL であり、子供たちがスムーズに学習に取り組めるようにとの配慮が感じられる。

²⁸ 「学生学芸員」プログラムについては博物館のウェブページを参照。

²⁹ 本段落の記述は、筆者の実地調査および Norfolk Museums Service, 'Collections management strategy 2018-2022', 2018 (https://www.thecollectionmuseum.com/assets/downloads/Collections_Development_Strategy_2018_-_2022.pdf) に基づく。連隊博物館の地域における(とくに教育面での)協働については、Thwaites, *Presenting arms*, pp. 130-132 も参照。

³⁰ こうした繋がりを利用して、連隊博物館と教会が協働してイベントを行う例も見られる。たとえば、グロースタの例を参照。'Tribute to nine glorious Glosters', *Gloucester Review*, 19 March 2015. (<http://www.gloucesterreview.co.uk/article.cfm?id=213&headline=Tribute%20to%20nine%20Glorious%20Glosters§ionIs=news&searchyear=2015>)

³¹ 記念像の詳細については、製作者シンクレアのホームページを参照。(<https://www.andrew-sinclair.com/memorial-duke-wellingtons-regiment-devon-sculptor-andrew-sinclair-mrss-unveiled-duke-wellington-obe-dl-17th-may-2019-regiments-home-h/>)

³² 'Tribute planned for the Duke of Wellington's regiment in Halifax', *Halifax Courier*, 12 March 2018. (<https://www.halifaxcourier.co.uk/news/tribute-planned-duke-wellingtons-regiment-halifax-327214/>); 'The Duke of Wellington's Regimental Memorial unveiling in Halifax', *News Centre: latest news from Calderdale Council*, 14 May 2019. (<https://news.calderdale.gov.uk/the-duke-of-wellingtons-regimental-memorial-unveiling-in-halifax/>) ハリファクスは、カルダデル大都市圏自治区の中核市である。

